

『教育実習テキスト地域文化編―田舎・僻地と思ってないか―』の編纂と活用

A textbook for student teaching about the local culture.
—Do not you think that Wakayama is the country or a remote place?—

海津 一郎
KAIZU Ichiro
(和歌山大学教育学部)

序

海津研究室は1996年の開室以来、「中世の共和国をこの世に再現する」という紀州惣国復活プロジェクトを推進してきた。1997年夏には、杵田荘絵図が中学高校教科書に載っていることで著名な杵田荘保存運動の一環として、「杵田荘―フィールドミュージアム'97」と題するシンポジウムを企画して、かつらぎ町笠田の地に300名の市民・研究者を集めて話題となった⁽¹⁾。以後、フィールドミュージアム（略してF・M）路線は、和歌山大学教育学部が、博物館資格取得の委員会を通じて、地域連携を試みる際の切り札として用いられ、のちに全学組織である紀州経済史文化史研究所が大学博物館（附属図書館3階が博物館相当施設）として自立する際のキーワードとなった⁽²⁾。

紀州惣国復活プロジェクトは、観光学部の設置にともない予算的な裏づけを得て、和歌山市・海南市の雑賀地区に焦点を合わせて、雑賀惣国・鈴木孫一復活プロジェクトとして多角的に展開した。とくに雑賀小学校、和歌山大学附属中学校、城東中学校、向陽高校、笠田高校などとは多角的な事業・授業連携が試みられており、おりからの教育学部の「実践的地域共育推進事業」（学校連携する教員に研究費を傾斜配分する戦略）と相俟って、教室内をも射程にのけた教材アイテム開発、アクティヴ・ラーニングとして成果を出しつつあった⁽³⁾。

海津研究室、および大学博物館紀州研では、学校教育と生涯学習が不可避的に連携している僻地教育実習に対して多大な関心を寄せてきた。例年のガイダンスにおいては、おりおりに私や紀州研博物館担当（研究支援員身分の学芸員）が参加して発言して、連携の枠組みを模索してきたが、いまのところ確たる成果が上がっていない。このほど、雑賀小学校担当の実習委員・豊田崇充氏が授業改善プロジェクトの枢要を担われたのを期に、ささやかながら僻地教育改革の具体的な提案をおこなってみた。教育実習テキスト地域文化編『田舎・僻地と思ってないか』の緊急編集刊行がその中身であるが、この紙面を借りて、その意義と狙いについ

て総括しておきたい⁽⁴⁾。

1 自己紹介・学校紹介

テキストの冒頭には、「―自己紹介―」というタイトルで、次のような書き込み用の空欄（図1参照）を用意した。自分の生まれ育った土地（住所で言うと大字＝近世村）の魅力を語らせることで、自然・歴史・文化への自己認識を覚醒させる。多くは驚くほど貧困な知識しか持ち合わせておらず、何らの積極的な地域活動などしてこなかったことに気づくことになろう。そして次に「学校紹介」である。赴任した実習校はいつ開校したのか、その背景は、どのような場所なのかについて調べさせる。地理上の空間及び歴史的な時間の認識によって、ひろく地域認識を深めさせて、真の意味で個性豊かな実践を志してもらおう。この認識なしでは小手先の授業改善、コップの中での幼児的な工夫くらいしかできないよ、というメッセージなのである。要は、地域のなかの学校の歴史を知れ、教室のなかだけでは生きた教育ができないという提起である。

試みに大学の一般教養の講義において配布して試行して見た。「実習校の開校年」「その年にあった歴史的な事件」の項目一。観光学部やシステム工学部の学生も居たため、仮に和歌山大学教育学部を実習校とした場合で記入させた。開学の年を大正年間の師範学校から数えるもの、戦後改革の中で数えるもの、半々くらいであった。その間の懸隔を自覚させて討論させただけでも、それだけで教育系大学に対する歴史認識の飛躍的な深まりが認められる。さらに「地名の由来」もちろん大字小字である。「一番近い寺社名」「祭礼の日にか」―これは最後の「学区の歴史・文化のみどころアピール」を記述するための布石である。寺社の機能は決して宗教施設だけにとどまらない。「社会」の語に示される如く、地域の寺社は多くの場合、政治の中心であり、文化の発信基地だった。これに注目すれば、不可避免地にその地の共同体の個性や「伝統」について問うことになる。和歌山の近くの寺社といった場合、半数くらいの学生は紀三井寺だの日前宮だのでもない

遠方を持ち出してくる。「大字が地域だといっただろう、和太のある栄谷やせいぜい梅原や狐島から選ぶのだ」と指導し、身近な寺社から地域を見直させる。「神は細部に宿り給う」―梅原鎮守の大歳神社などは、神功皇后の「三韓（朝鮮）征伐」の霊跡にして（要石の岩神様をみたか？）和歌山城下の最北の砦というパワースポットであったことなど、少し調べるとわかってくる。なぜ信州一宮の諏訪明神が栄谷の村鎮守になっているかわかるか？など、こんな小さな調べ学習を通じて地域の輝かしい由緒が見直されてくる。この認識の回路はかならずや教室の中の教育実践にまで影響力をおよぼすはずだというのが私の発想である。

2 愛・惣国心

愛国心を回復せよ。とにかく起立し声を出しておけ一というような空疎で声高な愛国心教育がはじまりつつあるが、これでは腰のふらついた頼りない偽愛国者しか生まれないだろう。到底倫理的な生活規範の獲得などのぞめない⁽⁵⁾。

惣国とは中世（ざっくりいうなら熊野詣が隆盛していた時期から秀吉の天下統一まで、12～16世紀）にこの世に存在していた武装独立の自治共和国「百姓のもちたる国」の称である。紀伊半島には紀州惣国という最強最大の惣国が、中世の最後の瞬間まで続いていた。教科書に載っている惣国は、ふつう山城国一揆と加賀惣国一揆（一向一揆とも）のみである。山城惣国は1493年に潰れた（その後もたびたび顕在化はしたが）。加賀惣国は1583年まで存続した。だが紀州惣国はそれをさらに更新して、天正13年（西暦1585）4月22日まで続いた最後の惣国である。ヨーロッパ人宣教師ルイス・フロイスは「富裕な農夫たちの、おおいなる共和国的存在」と呼んで恐れた。私の研究室ではこの歴史的事実を重視して、DVD映像によって惣国の滅亡する事件・太田城水攻めを再現して、『中世終焉』の名の下に大学サーバーから広く全国に発信した。個別のDVDや歴史地図・論文集ももちろん併せて作成して普及した。

最近サーバーを移したので未見未聴の方は是非一見いただき自由に活用していただきたい。URLは mms://ai6sys3.sys.wakayama-u.ac.jp/ohta/（開発協力はシステム工学部情報通信システム学科の松田憲幸研究室）。私は愛国心を言う場合、この世から消え去った惣国を発見させてその再生（ないし再現）を行わせてみたい。「愛・惣国心」の試みである。少なくとも、意味の分からない実態を分かったふりしているよりは、深く丁寧に地域への思いを培うことができるからである。

ちなみに第1部「中世、帝国と2度にわたり戦い日本の独立を守った紀伊惣国」というキャッチフレーズは(図2参照)、最近の研究により紀州惣国が日本列島内で有名だっただけでなく、東アジア社会において「イリヤ・ドス・ラドロイス」(＝中世ポルトガル語で倭寇島)として名高く、イエズス会・東インド会社など西

欧の侵略勢力にとって脅威の国であったことを強調したものである。もう一回は鎌倉時代。モンゴル帝国(大元ウルス)の侵略を紀州の水軍兵力と神々(神軍)が斥けたことは私の本当の研究テーマである(海津『蒙古襲来』吉川弘文館、1998年参照)。したがって和歌山への愛とは、国家の枠組みをこえたアジア世界規模の「倭寇の島」への思いに広がっていくのである。紀州の地はこのような特別な世界であった⁽⁶⁾。

3 「第3部 雑賀小学校の教育実践」

本書のなりたちは、「惣国復活プロジェクト」を2007年頃より雑賀小学校の有本校長(当時)との間で推進したことが直接のきっかけになっている。P6・7には雑賀小学校の研究成果と私たちのプロジェクトのかわりを示した(図3)。英雄鈴木孫一(雑賀孫一)の演劇や紙芝居や芸能にも深く関わった。その前提には福田光男教諭(当時)が中心となって作成した『創立百周年記念誌・左日鹿野』や創作演劇『日本一のやまらい雑賀衆』などの研究蓄積がある。私たちのプロジェクトは、同校のもつ研究蓄積を踏まえて、それに即して成果を積み上げた。もしプロジェクトが地道な成果を残しえたとするなら、その成功の秘訣は、こうした対等連携にあったに違いない。大学研究室と小学校にとどまらない、矢の宮神社や和太鼓クラブ夢鼓隊など地域の諸団体との多角的な学びあい・情報交換も重要な要素だった。

結

売出しが弱かったためか、いまだ教育実習委員会との間で教育実習テキスト活用の組織的なレクチャー等もてないでいる。主に社会科専攻の学生や関係授業において、個別的な普及をはかっているレベルにとどまる。ここでは編纂の意図を示すことにより、次のステップにすすむための布石としたい。私の大学における教育実践の方法提起は、入試問題作成を軸にした『地域文化コミュニケーター教員への道・WADAIの日本史10年の歩み』(2007年刊)と本書とで一応の完結をみたように思う。これがどのように教育現場に影響を及ぼせるか否か、その展開を注視していきたい。もちろん、ゼミ生・専修生らの活躍を通してということになるだろう。

〈註〉

- (1)1997年7月6日の現地シンポジウムで故小山靖憲(海津の前任)・上横手雅敬両氏が講演した。その成果は『和歌山地方史研究』33号に掲載されて、国庫補助による5ヵ年荘園調査の実施をはじめとするその後の和歌山歴史科学運動再生の第1歩となった。ごく最近、和歌山歴史学15年の歩みを問う企画出版、海津編『紀伊国杵田荘』同成社(2011年5月)を刊行した。
- (2)フィールドミュージアム路線については、海津「荘園調査の行方―きのくに荘園調査・覚書―」(日本史研究492号、2003年)、同「和歌山大学博物館の雑賀惣国復活プロジェクト」(同誌573

号、2010年）を参照されたい。

- (3)教材開発として具体化したものに、雑賀小学校連携『紙芝居』・『紙芝居孫一どんとヤタガラス』『演劇・孫一雑賀川の戦い』『実演・孫一太鼓』『実演・雑賀踊り』『DVD太田城水攻め』『F・M史跡探訪マップ』（5種）『歴史探訪カリキュラム（笠田荘・太田城・荒川荘）』など。また学生は、那智山参詣曼荼羅、道成寺縁起絵巻、高野山石童丸物語の絵解き興行が出来る。紀州研F・M叢書の企画出版『中世終焉』清文堂や、海津研究室刊行の『よみがえれ孫一』『新編世界遺産参詣曼荼羅』『新編道成寺縁起絵解き』（2008～2010）などを見られたい。
- (4)ありていに言って、現代学校教育の原点をさぐるという僻地教育実習の試みは、教員採用というシュウカツに限るならば効果をあげていない。大阪・兵庫など関西圏はもちろん和歌山においてさえも教育現場のニーズがそこにはないからであ

る。それでは、いかにして再生の道をさぐるべきか。「地域改革の発信基地としての学校」をキャッチフレーズとして、そのプランナーとしての教員を養成するというのはどうだろうか。これならば、僻地や複式学級のみならず、都会のマンモス校において独自の力量を発揮して学校改革の礎になると思う。以下そのことを主眼とした僻地教育改革を提言する。これは当然ながら一般の教育実習においても応用できる。

- (5)これはかつて、和歌山大学教育学部（和歌山県師範学校）の出身だった西岡虎之助が、皇国史観に抗して主張した論理でもあった。
- (6)もちろんこのような武装自治の国が手放しで礼賛されるものではない事実については、現代に至る負の遺産を直視させる海津編『新編 道成寺縁起絵解き』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2011年や米田頼司著『和歌祭』帯伊書店、2010年などを参照されたい。このテキストにも9・10ページに「中世紀州魔界地図」として一部を抜粋して収録している。

— 自 己 紹 介 —	
学籍番号： <input style="width: 90%;" type="text"/>	専 攻： <input style="width: 90%;" type="text"/>
氏 名： <input style="width: 90%;" type="text"/>	指導教員： <input style="width: 90%;" type="text"/>
(出身地 県)	
住 所： <input style="width: 90%;" type="text"/> 県府	
住所地名の由来： <input style="width: 90%;" type="text"/>	
住所（故郷）の歴史や文化のみどころ、アピール	

実 習 校： <input style="width: 90%;" type="text"/>	担任教員： <input style="width: 90%;" type="text"/>
(出身地 県)	
住 所： <input style="width: 90%;" type="text"/> 県	
住所地名の由来： <input style="width: 90%;" type="text"/>	
一番近い寺社名： <input style="width: 90%;" type="text"/>	宗派祭神： <input style="width: 90%;" type="text"/>
祭礼の日： 月 日… 月 日…	
実習校の開校年： (西暦) 年 (和暦) 年	
その年にあった歴史的事件： <input style="width: 90%;" type="text"/>	
学区の歴史・文化のみどころ、アピール	

図 1

モンゴル／西欧

第1部

中世、帝国と2度にわたり戦い 日本の独立を守った紀伊惣国

空海の帰国時に海上で魔物たちから守ったという守り本尊。元寇の戦いでは、幕府の命令で異国降伏の神いくさに出陣して神風の奇跡をおこして日本を勝利に導いたと信じられた。



鎌倉幕府の大本営は高野山霊場にあつた。

高野山参詣道の町石道は文永・弘安の時に整備されて石造塔婆が建てられた。元寇に勝利するための秘策として幕府が実行した工事である。



町石道 (その地下には調伏の呪紋を書いた経石が)



神いくさの図 丹生四社明神像 (個人像)

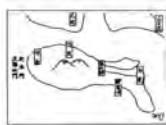
神風によってモンゴル軍が全滅したという弘安四年七月、高野僧と神人が博多湾に派遣されて波切不動を据えて呪詛を行った遺跡である。かくして神風は吹いた…。



志賀島の火焰塚
(金印で名高い博多湾の島)

第3部

雑賀小学校の教育実践(創立百周年記念誌『左日鹿野』より)



雑賀野(『紀伊続風土記』より)

それは、和歌山市の南野天神山から北方の西浜、間戸から打越・福屋にかけての「帯」というもので、「左日鹿野」は天神山北方から秋葉山にかけての平野帯をいいたものであろう。また、万葉集に出てくる「紀の国の秋日鹿の浦に出て見れば海人健大

「左日鹿」とは、現在のどの辺りをいうのだろうか。

「サヒカ」という地名が記録に現れたのは、神皇元年(一四二)に聖武天皇が和歌浦へ行幸された時、そのお供をした山辺赤人が詠んだ歌の中の「左日鹿野」→「サヒカノ」が最初といわれている。

山辺赤人といえば、和歌浦の情景を詠んだ「若の浦に潮満ち来れば海を無き道とてしつゝ流る」の作者として知られている。

「サヒカノ」はこの歌の長歌の中に出てくる。

それは、

やすみし わが大王の常宮と せよとつれる

左日鹿野 背向に見ゆる 沖つ島 清き浦に……

の「左日鹿野」である。

三 雑賀野と雑賀浦

「サヒカ」という地名が記録に現れたのは、神皇元年(一四二)に聖武天皇が和歌浦へ行幸された時、そのお供をした山辺赤人が詠んだ歌の中の「左日鹿野」→「サヒカノ」が最初といわれている。

山辺赤人といえば、和歌浦の情景を詠んだ「若の浦に潮満ち来れば海を無き道とてしつゝ流る」の作者として知られている。

「サヒカノ」はこの歌の長歌の中に出てくる。

それは、

やすみし わが大王の常宮と せよとつれる

左日鹿野 背向に見ゆる 沖つ島 清き浦に……

の「左日鹿野」である。

雑賀の史跡

雑賀の地には、東に秋葉山・御坊山・愛宕山の連山と、南に雑賀山と呼ばれる天神山・常陸頭山、そして雑賀崎に続く山があり、これらの山すそから北西方に平地が広がり、西に海をもつ豊かなところである。

約六千年前、今、人々が住む平地はまだ海床であり、雑賀の山々のすそに波が打ち寄せていた。約四千年前、海面が低下し、それにつれて海浜が生まれ、その砂が西方からの風によって吹き寄せられ、磯の浦から宇須辺りまで砂州ができた。秋葉山系の山や雑賀山はまだ島であったという。その秋葉山に、縄文時代晚期(約三千年〜二千三百年前)の遺跡があり、また、弥生時代から中世に至る集落遺跡が雑賀山のふもとに残されている。

「サヒカ」という地名が歴史に登場したのは、神皇元年(一四二)の頃である。その年に聖武天皇が和歌浦へ行幸されたとき、それに随行した山辺赤人が、雑賀の風景を詠んだ歌の中に、「左日鹿」とある。

その後、平安時代の文獻には、「雑賀」として地名が出てくる。中世、「雑賀」と呼ばれた地域は、今の市内の和歌川以西の広大なものであり、戦国時代に登場した雑賀衆の活躍した所であった。

近世の雑賀は、紀州藩の御殿・庭園の造営や、また、水軒の開墾など紀州藩との深い関わりがあった所である。

そして、近代から現代へと、古い歴史の上に新しい文化を積み重ね、現在に発展してきた。

- 一 秋葉山の遺跡
- 二 間戸の遺跡
- 三 雑賀野と雑賀浦
- 四 雑賀山と雑賀衆
- 五 信長の雑賀攻め
- 六 水軒の防波堤と松林
- 七 雑賀池
- 八 イナ川
- 九 古川・大浦
- 十 李徳淡と雑賀
- 十一 西浜御殿
- 十二 養蚕園



雑賀の松原(『紀伊続風土記』より)

☆ 和歌浦への道

奈良、平安時代の郡人たちは、和歌浦の遊覧のために、どのような経路をとって来たのだろうか。

聖武天皇行幸の「行が和歌浦に永夜経路は、「奈良の都を出て紀ノ川ぞいで下り、玉垣嶺宮(御河付道)を経て、船が付道で川を渡り、上三毛、吐前を通り、布部屋、和後、栗栖、太田、岡の集落を通り、次上浜、雑賀野、間戸を経て、和歌浦に入った」と推測される。海のない奈良や京の都から来た人々が、雑賀浦の青い海を見たときの感動は大きかったと想われる。

波の間に見ゆ」の「秋日鹿の浦」は、雑賀の西部の西浜一番から雑賀崎にかけての海をさすのであろう。

合雑賀松原

承永三年(一〇四八)間白鳥景頼の「高野山御参詣記」の中に「雑賀の松原」と記されている。

この「雑賀の松原」は秋葉山の西方の西浜の辺りをさしているようである。



2009年3月3日の雑賀踊り記念日には2〜5年生の600人が体育館で雑賀踊りを学んだ。



生徒の感想文さし絵



孫市太鼓 夏祭りに孫市太鼓をうつようすい保育園の卒園生たち

四 雑賀荘と雑賀衆

鎌倉時代から室町時代にかけてつづかれた荘園名としての雑賀荘は、明徳三年(一三九二)の記録から、中島、宇治、岡、雑賀が含まれていたことがわかっていく。

室町時代になると、雑賀五組とよばれる地域的な連合組織である惣領が形成された。この雑賀五組は、紀ノ川下流域の雑賀荘、中島、十ヶ崎、三上崎、社家崎の五つの郷からなっていたが、その中心部にあつたのは雑賀荘であった。当時の雑賀荘は、永禄五年(一五六一)の記録によると、本郷(岡)、岡、宇治、市場、三日市、中島、土橋、福島、狐取などの地域からなり、古くから間戸の矢倉神社を産土神としていたようである。

その雑賀五組を中心に活躍したのが、雑賀衆である。雑賀衆は鉄砲という当時の新兵器をいち早く入手し、鉄砲隊を組織していたため天下にその武勇をこぞろかせていた。

日本への鉄砲伝来を伝える「鉄砲記」には次のように記されている。



「天文十二年(一五四三)九州の南にある種子島にポルトガルから鉄砲が伝わった。その鉄砲が、いち早く根をきき、坊と洋



雑賀五組の惣領図(『和歌山市史』より)

田監物により紀州にもたらされたのである。」

元龜元年(一五七〇)、織田信長と一向宗の本山である石山本願寺との合戦が始まった。その一向宗門徒の中核を占めていた雑賀衆は本願寺に味方をし、自慢の鉄砲で信長を大いに苦しめた。

五 信長の雑賀攻め

雑賀区内の東部、国道四十二号東側にある愛宕山・御坊山・秋葉山などの山は、織田信長の雑賀攻めの時、それを迎え撃つ雑賀勢の砦（とりで）となった。

天正五年（一五七七）二月、天下統一を固める織田信長は、石山攻めにあたって、石山本願寺の強力な後ろ盾である雑賀勢を攻め滅ぼすことが必要となり、紀州に出兵、雑賀川（和歌川）の左岸に布陣した。

迎え討つ雑賀勢の砦の構えや戦いの様子が、『紀伊国名所図会』に書かれている。それによると、

「織田勢の進攻を知った雑賀方は、いよいよ最後の決戦と決心して『和歌御坊山』（今くじやま・現御坊山）を要害と決め、雑賀川（和歌川）小雑賀のあたりの川の上と下に、また、名草浜・玉津島のはどりの川中に、桶・つばなどを大量に埋めて、織田勢が川を渡ってきたとき、その人馬の足をすくう備えをした。

三月三日、織田方がいよいよ攻めてきたので、雑賀方は、御坊山を主な砦にして、北は「吹上の峰」（現在の城山）の脊に、五百人を配置した。

一方、雑賀川へは紀ノ川の水をせきいれ、橋・逆巻水（さかも）を立てて、敵勢の渡河に備えた。

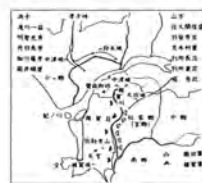
中の手には、原見坂（現原見町）宇須（東御坊山）の脊で、鈴木

孫一をはじめ紀伊内太夫、その他、那賀・海士、名草三郎の勇名の郷士が守り、そして『和歌御坊山』（今くじやま・現御坊山）の脊に大筒（大砲）を立てた。

南の方は、玉津島・名草浜の脊で、百人、御坊山の本陣は御坊山四郎が守った。

雑賀川を渡ろうと寄ってきた織田勢に向かつて、南北から南のようになり矢や鉄砲を撃つので、その大きな音に驚いた織田方は、退却しようとして川の中に入ったところ、川底に備えられた桶やつばに足をどられた上、折からの大潮で川が増水して、織田勢は溺れたたりして川の中で混乱した。

雑賀方は、これに向かつてさんざん鉄砲や矢を打ち込んだので、織田方は、たちまち百五十騎討ち死にされ、川向こうに退却した。」とある。この戦いは後に「小雑賀の戦い」と呼ばれた。



信長の紀州攻め
『和歌山県史』より

上の図は、両勢の布陣の様子である。
矢宮の南方にある雑賀城は、和歌山の妙見山にあつた雑賀勢の本拠であつた。

1 矢宮

信長勢がいよいよ雑賀に攻めてくることがわかった村人たちは、矢宮に集まり、敵が退却して村が無事であるようにと、神に祈願した。

その時、神は巫女（みこ）に託して「敵は、三月三日の千瀬を利用して攻めて来るが、その時は、神は村人たちのため、潮を干さないようにしよう」と告げられた。

当日になると、神のお告げ通り、雑賀川は大潮で増水して、敵兵はこの川を渡ることで退却し、村は敵に荒らされずにすんだという話が残っている。

2 雑賀踊り



雑賀踊り
『和歌山史』より

戦いが終わると、雑賀勢は、刀を振りかざし、打ち合わせて鳴らしたり、鉄砲や弓を打ち振ったり、指し物を振り回したりして、踊りまくった。そうして戦いに勝ったのは、神や仏のおかげであるといふ宮に集まり、社の前で喜び祝った。

このときの踊りや袖子が後に「雑賀踊り」となり、泉原宮和歌祭りの祭礼行列に参加するようになった。

みつけた古態の雑賀踊り



和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵「和歌浦図屏風」



トレース図 ©岡吉君子画(和太本)



印南祭りの雑賀衆によるケンケン踊り(雑賀踊り)